● 2日目：浪江町での講演、被災地状況視察、交流活動、防災士養成講座

●講演
浪江町の復興

一般社団法人
まちづくりなみえ
事務局
次長　**菅野 孝明 氏**

浪江町内を視察する前に浪江町地域スポーツセンターにて、一般社団法人まちづくりなみえ事務局の菅野孝明氏から、浪江町「復興レポート」を資料として、浪江町の現在の復興状況と今後の復興ビジョンについて講演をいただきました。

（菅野氏のお話より）

東日本大震災当時の浪江町の人口は、約21,500人でした。地震後、町内全域が避難区域でしたが、平成２９年３月３１日にこの町の面積の２割に相当する区域が避難指示解除になりました。現在の人口は約1,000人です。

町内をバスで通る際に、車窓から街の中がどんな風景なのか見てください。住んでいる方々ももちろんいますが、住宅の解体が進んでいて、虫食い状態になっている市街地を見ることになります。現在は4,000軒を超える解体予定のうち、７割の進捗です。まだまだこれから空き地が広がっていきます。鉄道に関しては、JR常磐線が来年の３月には全面開通して、品川から一本でこの浪江に来ることができるようになります。常磐自動車道も、現在、拡幅工事が行われています。

浪江町の農業の中心は米で、震災前は町全体で1,500ヘクタールの作付けをしていましたが、今年作付けされたのは27．７ヘクタールです。つまり、農業をやる人がいないということです。農業の再生が、風評被害の現状もあってなかなか難しいという状況です。

食べ物が駄目なら花ならなんとかならないかということで、全く素人だった方がトルコキキョウの栽培にチャレンジして、今では、浪江町のトルコキキョウは東京の卸売市場で最高値を付けています。さらに、海外市場にも進出しようということで、多くの方がこの花き栽培にチャレンジしているという明るい話題もあります。

漁業施設もようやく先月完成して、船も27そうで試験操業をしています。これも復興の明るい材料の一つです。

浪江町には、地域のつながり、お互いに共助という考え方で成り立っていたコミュニティがありました。今はそのコミュニティを新たに作っていくお手伝いをしています。県内では交流会、あるいは戸別訪問などを行いながら、つながりの維持に尽力しています。

教育環境ですが、町内の六つの小学校、三つの中学校は全て休校となっています。避難指示が解除され、戻ってきた児童、生徒のために平成30年４月になみえ創成小学校、中学校が新たに開校しております。小学校には14人、中学校には２人の子供が通っています。

建物をどんどん建てることが復興ではないと思います。何が復興なのかということを丁寧に考え、住民との丁寧な対話を続けていく必要があると思っています。

●被災地状況視察　浪江町

参加者は、一般社団法人まちづくりなみえのスタッフから、地震発生時の様子や現在の復興状況の説明を受けながら、現在の浪江町内の状況を見学しました。

途中、３箇所でバスから降車し、風景をじかに見ることで、地震や津波の威力を感じ取りました。

請戸小学校は海岸から約２００メートルに位置し、地震発生当日の津波により、１階部分は浸水した。当日校内にいた児童や教員は、１．５キロメートル程度離れた高台にまで迅速に避難し人的被害を出すことはなかった。福島県内では初の震災遺構として保存される予定である。

町営大平山霊園は請戸小学校の児童や教員が避難した高台に、地震発生からちょうど６年が経った平成２９年３月１１日に造られた霊園である。彼岸などに墓参りに来た住民同士が、顔を合わせることができる場所を町の復興の一番始めに造りたいという願いも込められている。町内で亡くなった方を記銘した「浪江町東日本大震災慰霊碑」も建立されている。

請戸漁港は浪江町で唯一の漁港であり、津波により漁港施設が壊滅した。請戸漁港に係留されていた漁船は、津波や避難指示の影響で、他地域の漁港に係留することとなった。避難指示が解除されて以降、復旧作業が進められている。訪問時点において、漁業再開に向け試験操業が行われている。また、請戸漁港の堤防からは、震災前は 1,600 人が居住していた請戸地区を一望することができる。

●被災地高校生との交流活動　福島県立ふたば未来学園高等学校

東北地方太平洋沖地震及びこの地震によって発生した福島第一原子力発電所事故のために、双葉郡内の高等学校はサテライト校として県内外各地に分散を余儀なくされました。困難な状況を乗り越え、復興を実現する鍵は人材育成にあるとの考えの基に、ふたば未来学園高等学校は平成 27 年に開校しました。その学校を訪問し、地元の高校生と交流活動を行いました。

参加者たちは、校内の多目的ホール「みらいシアター」にて、ふたば未来学園高等学校の代表生徒から出迎えを受けました。

学校説明の後、参加者とふたば未来学園高等学校社会起業部に所属する生徒たちとの交流を目的としたグループワークが実施されました。参加者は五つの班に分かれて、班ごとに震災について聞きたいことを 10 個程度の質問にまとめ、ふたば未来学園高等学校の生徒にインタビューをして内容を共有するというグループワークでした。参加者とふたば未来学園高等学校の生徒たちは、すぐに打ち解け和やかな雰囲気の中で活発なグループワークが展開されました。

一方、参加教員は別室にて、地震発生直後からの学校教員の対応について実際に経験した教員から話を伺い、東京で災害が発生した場合に備えて、学校の体制として何が重要か学び取りました。

号に行く()
内容を共有

●防災士養成講座［7］
行政の災害対応

双葉地方広域市町村圏
組合消防本部
係長　**志賀 隆充 氏**

志賀隆充氏からは、東日本大震災の災害現場で撮影した画像を映しながら、地震発生、津波発生、原子力発電所事故という全く予想のつかない事態が次々と発生した中、消防としてどのような判断で、どのような現場活動を行っていったか、時系列に沿って解説していただきました。

福島第一原子力発電所の事故により、消防職員にも退避が命ぜられ、救助に向かうことができず任務遂行することができなかった苦しみについても語られました。

災害現場では、臨機応変に対応することや思いやりをもって対応に当たることの重要性が伝わる講義でした。

（志賀氏のお話より）

自衛隊は国単位、警察は 47 都道府県単位、消防は市町村単位となっています。大きな災害やテロの発生となると、地元の消防だけでは対応が困難なので、近隣や全国の消防が応援する仕組みになっています。本地域の消防は、双葉地方広域消防本部として、広野町、楢葉町、富岡町、川内村、大熊町、双葉町、浪江町及び葛尾村の八つの地域で合同で組織されています。東日本大震災は、甚大な被害をもたらし、双葉郡内全住民７万人の避難という事態をもたらし、管轄内で 1,657 名の犠牲者が出ました。

地震災害、津波災害、原子力災害に見舞われたこの地域では、８年半経過した今でも災害対応を継続中です。震災当時の１５％しか人口はいません。避難先での学校や仕事などで帰りたくても帰れない状況があります。住民が帰れる日まで、前を向いて地域を守っていきたいと思います。

●防災士養成講座［8］［9］

避難所の開設と運営
～さすけなぶる～

福島大学うつくしまふくしま
未来支援センター
特任教授　**天野 和彦 氏**

天野和彦氏からは、福島県内で最大規模の避難所であった「ビッグパレットふくしま」での支援チーム責任者としての経験や、避難所運営について研究されている内容を基にした講義と避難所運営の演習をしていただきました。

２部で構成され、１部は、避難所でのようなことが発生したのか振り返り、避難所はどうあるべきか考える講義でした。２部は、避難所運営で実際に発生した問題を解決していきながらその教訓を学ぶことができる、ワークショップ型防災教育ツール「さすけなぶる」を用いた実践演習でした。

実例でのトラブルが題材であったことから、身近なこととして捉えることができました。避難所運営においては、独断でなく、話し合いながらも迅速に課題解決をしていかなければならないことを痛感する講義でした。

（天野氏のお話より）

東日本大震災の避難者数は 50 万人、熊本地震では 18 万人でした。東日本大震災は 8 年経った今でも事態は収束していません。今後予想される首都直下地震での予想避難者数は 700 万人、南海トラフ大地震では 950 万人とされています。

災害による死は二つに分けられ、一つは自然災害による「直接死」、もう一つが避難所生活の中での心の病などが原因による「関連死」です。熊本地震では、「直接死」よりも「関連死」の方が多い状況となっています。このことは大きな意味をもっていてます。物資の支援も大切である一方、関連死を生み出す原因を取り除く視点から避難所を考えるべきです。

避難所の使命（ミッション）は「命を守る」ことです。そして、その避難所を運営するためには「交流と自治」が大切です。「交流」とは、例えば足湯やサロン（喫茶店）など、リラックスできる環境と、被災者とボランティアの方々、人同士の交流が生み出される場を作り出すことです。また、「自治」とは、被災者の方々で役割を分担し、被災者自らが避難所を運営する仕組みを作り出すことです。つまり、避難所を運営するこいうことは、被災者の「生きがいと居場所」を作り出すという考えが重要です。

避難所では、「全体」を見ることも大切ですが、「個」を大切にしなければなりません。「さすけなぶるの五つのキー」は、個々の問題を解決するための視点となります。

「さすけなぶるの五つのキー」

- **さりげなく** ＝ 被災者の声に耳を傾け、生活環境の改善を進めよう。
- **すばやく** ＝ 被災者の生活（暮らし）実態や課題をしっかり把握しよう。
- **けむたがらずに** ＝ 被災者同士、被災者と支援者等が交流できる場を作ろう。
- **ないものねだりはやめて** ＝ 地域の専門機関や団体等のネットワークを活用し、課題解決を進めよう。
- **ふる（ぶる）さとのような** ＝ 被災者の参画による自治的な組織を作ろう。（避難生活は、生活再建の第一歩であること忘れずに）

2日目に学んだこと、考えたこと

浪江町視察

語り部の方が、若者ややる気のある人が浪江町に訪れ、町の再建に貢献していることを嬉しそうに語っていた。私が大人になって、自分に余裕があり、力になれそうなことがあったら、積極的に行動したい。	生徒
東日本大震災の跡が残っていた。被災した小学校を見ただけで、震災の恐ろしさが伝わってきた。	生徒
当時の様子が今でも残っているということは、それをこれからの人に伝えることができるということだ。後世に被害を伝えるということは大事だと思う。	生徒
請戸小学校の児童の避難の話を聞き、地域の地形を把握することはとても大切なことだと知った。家族、友人にも教えなければならない。	生徒
請戸漁港に揚がる水産物も放射性物質が計測され、安全基準を満たしていることが確認されて福島県産として市場に出回っていることを学んだ。風評被害で消費者が買ってくれない現状をどのように改善できるか、自校に戻って友達と一緒に考えてみたい。	生徒
請戸小学校は、想像を絶する風景であった。学校は、形が違えど、いつも自分たちが仕事をしている場所だけに、恐怖を感じた。	教員

福島県立ふたば未来学園高等学校との交流

高校での交流活動までは、大人からしか話を聞いていなかったため、あまり実感できなかったが、同年代の話を聞いて、実感することができた。	生徒
震災への思いを聞いたときに、新しく町が変わることによって、昔よりグレードアップ・成長し、次への可能性があるから悪いことばかりではなかったと言っていた姿が印象的であった。	生徒
ある生徒は、「地震発生後、他の県に移って学校に行っていた。そこで放射線に関するいじめにあった。」と言っていた。このとき、怒りがこみ上げたが、福島県環境創造センターでの見学がなかったら、自身も加害者と同じであったかもしれない。	生徒
何より日頃の避難訓練を大切にするべきというアドバイスをもらったので、これから真面目に取り組みたい。	生徒
彼らが経験して得た教訓の一つとして、家族との連絡方法や集合場所を定めておくことの重要性を主張していた。その教訓をすぐに実行したい。	生徒
被災というと、避難所をどうするか、在校生の保護や安否確認をどうするかという点に着目してしまうが、入試時期の災害発生という視点もあることに話を聞いて気付かされた。通常の業務ができなくなったらどうなるのか、どうしたらよいのか想像力を働かせておくことが必要である。	教員

防災士養成講座［7］

過去に「助けを呼んでいる人たちがいるのに、その人たちを助けることができないのが辛かった。」という消防職員の手記を読んだことがあったが、今回は生の声を聞き、自分の想像を超える状況に、言葉を失った。	生徒
私たちの想像を絶する様々な経験を聞き、地獄のような状況であったことが分かった。救出を放棄することを決断したときは、本当に苦渋の決断であっただろう。	生徒
災害時には、迅速な救助が大事である。反応一つない瓦れきの中をやみくもに探すことに時間を割くよりも、人がいると分かっている瓦れきの中を救助した活動は最善だったと思う。	生徒
被災者の救助の際、役割分担ができていることが分かり勉強になった。２次災害を防ぐために監視する担当を付けるなど、参考になる講義であった。	生徒
地震時は、救急車や消防車がすぐに到着するかどうか分からない。東京では木造住宅密集地域での建物倒壊や火災が想定されているので、そういった場所で対応できるような知識やスキルを身に付けていき、いざという場面で、防災士としてふさわしい活動をしていきたい。	生徒
講師の話を聞き、地震時は、消防、警察、自衛隊の人たちでは人手が足りないことが分かった。私たちが自ら行動していかなければならない。この講義を受けて防災士の資格を取りたい気持ちが強くなった。	生徒
職種の違いはあるが、我々教員も生徒たちの命を預かっている。預かっている命をいかに守るか、そして守りながらも自分たちの命をどう守るかなど考えていかなければならない。	教員

防災士養成講座［8］［9］

避難所での生活を軽く見ていたと思う。今まで、災害から身を守ることばかり考えていたが、その後の避難所での生活も同じくらい考えなければならないと実感した。	生徒
避難生活において、高齢者のお話を聞いてあげることは私たち高校生でもできる活動だ。	生徒
災害を人権の視点で考えたことがなかった。イマジネーションを大切にして、見方を変えられるようにしたい。	生徒
ボランティアや役所の人が全て行う、与えるのではなく、住民が周りの人を巻き込んで対応することにより、コミュニティが発生し、避難所運営が円滑になることを学んだ。	生徒
講師の考えを聞くと同時に、自身の考えは管理寄りの考え方であったと感じ、公平より公正という言葉が響いた。	生徒
講師は避難所運営において、管理ではなく自治を優先させると話していた。自治は重要であるが、学校に避難してくる大勢に対応するためには、管理下の自治が良いと考える。	生徒
現在の防災は「モノの防災」であるが、やはり大切なのは「考え方の防災」であると思う。防災環境が整っていたとしても、市民がそれを有効活用できなければ意味がない。	生徒